

「～てしまう」に含まれる「つ」「ぬ」のモダリティー

The Modality of ‘～てしまう(～teshimau)’ Originated
in the Ancient Auxiliary ‘つ(tsu)’ and ‘ぬ(nu)’

中 野 はるみ

Harumi NAKANO

目次

はじめに

I 助動詞「つ」「ぬ」理解の変遷

- (1) 「つ」「ぬ」の理解
- (2) 大槻文法
- (3) 三矢文法
- (4) 山田文法
- (5) 松尾文法
- (6) 橋本文法

II 松下文法における「つ」「ぬ」

III 「～てしまう」に残る「つ」と「ぬ」のモダリティー

おわりに

summary

In this paper I have described about the auxiliary ‘つ(tsu)’ ‘ぬ(nu)’ that was used from ancient times until the Kamakura Period, and the difference from the similar expressions ‘たり(tari)’. The modern word ‘～てしまう(～teshimau)’ implies the ancient auxiliary ‘つ(tsu)’ and ‘ぬ(nu)’. I tried to make clear the characteristics of Japanese which has the originarity idea for the objective expression and the subjective one. That’s means Modality.

キーワード

モダリティー 「つ」 「ぬ」 「～てしまう」

はじめに

日本人の思想を明らかにしようとするとき、人は日本人の歴史を明らかにしてきた。日本語で記されてきたその歴史には、日本人の思考様式が反映している。事態の捉え方にそのことばを使う人々の思想が反映するのである。ことばの法則性のなかに人々の思考のあり方は如実に映し出される。

ことばの法則性の一つに文法がある。文法は個人の作業ではなく、そのことばを使って生活してきた人々の思考と想像の所産であり、歴史的、及び社会的なものなのである。

筆者はこれまで現代語「て」について考察を進めてきた¹⁾。これまでの研究から明らかになってきたことは、接続助詞「て」のもつ意味と機能の多様さであった。「て」の多様性は「て」

の歴史的変遷過程を追うことによってさらに明確になってくるであろう。

本稿では、接続助詞「て」の語源とされる文語助動詞「つ」を、明治以後の著明な文法家の理論を中心に追っていき、古代から鎌倉時代まで使われていた助動詞「つ」に表れていた当時の人々の表現形式を、他の意味上似ている表現「ぬ」「たり」とともに調べていく。特に松下文法の主張した「つ」と「ぬ」の理解は、本稿の目的上なくてはならない理論であるが、その理解の特異性を示すためにも他の文法家の「つ」「ぬ」周辺に関する理論をトレースしなければならなかった。

文語助動詞「つ」「ぬ」は鎌倉期まででその命は終わってしまう。一つの言語がその民族的・歴史的所産である限り、ぷつりとなくなってしまう言語表現はあるものではない。一つの助動詞の終結はその意味表現を他の表現に移していったと考えられる。鎌倉期までの日本人が「つ」や「ぬ」に表そうとしていた表現がそれ以後どのような表現に変化してきたのかも探る必要がある。多面的意味合いを持つ接続助詞「て」に文語助動詞「つ」「ぬ」の意味が残されていると考える時、「つ」「ぬ」そのものの中に、現代語「～てしまう」に受け継がれてきた日本語のモダリティ表現の一つが存在していたのだとは考えられまいか。

I 助動詞「つ」「ぬ」理解の変遷

(1) 「つ」「ぬ」の理解

まず、「つ」の意味について、『日本文法事典』では、「つ」は「ぬ」「たり」「り」と共に《完了の助動詞》に分類されている。多くは「ぬ」と共に説明され、「主として動作・作用の完了を確認する」表現とされる。さらに「つ」と「ぬ」の違いについては、

「つ」は、主に主観的な動作や意志的な作用について使われ、他動性の表現に用いられることが多いのに対して、「ぬ」は客観的・無意志的な場合に使われ、自動性の表現に現れる傾向がみられる。

(田中彰夫 p. 204.)

と記されている。ここで表されているのは、他動詞—自動詞、意志動詞—無意志動詞の対応関係から視る古い説中心である。また、『国語学大辞典』には、

完了の助動詞は、用言的接尾語(使役・受身・希望)と助動詞の中間に位置する。完了の助動詞「つ・ぬ」が、完了というやや素材的な側面と、確認という主観的な判断作用とを二つながら表し、その直前に来る動詞(存在詞・活用連語)の表す文脈的意味に応じて使い分けられることが多いのはこのためである。すなわち、「つ」は、動作過程・状態存続表現型の動詞(存在詞・活用連語)について、動作終結・状態持続を確認し、「ぬ」は動作結果・状態存在表現型の動詞(存在詞・活用連語)について、動作結果発生・状態存在を確認した表現として用いられる。(井手至 p. 208.)

と前典よりは、新しい説明が取り入れられている。しかし、辞典の性質上説明が少ないのはやむを得ないにしろ、定説がないとされる「つ」と「ぬ」の説明にはさらに詳細が必要である。助動詞を「用言の複語尾」と分類したのは山田孝雄であり、使役、受身、希望の助動詞を他の助動詞と区別したのは橋本進吉であるし、使役、受身、希望の助動詞を「たまふ、奉る、まいらす」と共に「用言的接尾語」と呼んだのは時枝誠記であった。このように日本語の文法に使用されることばは文法家によって様々であり、その分類の範疇も一定ではない。「定説」のない「つ」「ぬ」に対する説明はことさら、慎重になされなければならないのである。

「つ」「ぬ」に対する説明は江戸中期、富士谷成章(1738-1779)によってすでに試みられて

いる。富士谷成章は、「て身」の項に分類している「つ」を「人に向かいてのみ言ふ」ことばとし、当時の口語訳として「タゾ」を当てている（『あゆひ抄新注』風間書房、p. 320.）²⁾。さらに、「去倫」の「ぬ」については、「『いぬ』といふ事をつづめて言へる」ことばとし、「ここを去りてかしこにゆくを言ふ言葉なり」と断定している（『あゆひ抄新注』p. 303.）。「ぬ」の口語訳として、富士谷成章は、「テシマフ」「ダンニナル」「ヤウニナル」「テシマフタ」「ヤウニナッタ」を示している（『あゆひ抄新注』p. 303.）。

文法家が努力を傾け説明をしようとした理解の変遷過程を辿ることによって、「つ」「ぬ」に対する説明を概観し、「つ」「ぬ」に対する説明の空白を明示していきたい。以下、近代以後の文法学者の「つ」及び「ぬ」に関する理解を概観していくことにする。

（２）大槻文法

明治 15 年『廣日本文典』を表したのが大槻文彦（1847～1927）である。彼はその第 178 節において「助動詞」の項を設けている。

助動詞ハ、動詞ノ活用ノ、其意ヲ盡サズルヲ助ケムガ爲ニ、其下ニ付キテ、更ニ、種々ノ意義ヲ添フル語ナリ。

これは、日本語の分類上初めての名称である。第 214 節から第 248 節が「時」の助動詞中「過去」の助動詞の解釈である。第 216 節には

過去ハ、更ニ、半過去ト過去ト、大過去ト、ノ三様ニ分カル。半過去ハ、動作ノ方ニ終リタルヲイフニテ、「つ、」ぬ、たり、」ノ三助動詞ヲ用キル。

と記され、「つ」「ぬ」「たり」の意義は同じとしている。しかし、個々に説明の項はある。

第 226 節は「つ」である。そこでは、次のように記されている。

動作ノ果テ、止マル意ヲイフ語ナリ、此ノ語、諸動詞ノ第五活用ニ連ル。語源ハ「止」ノ轉トモイヒ、「果つ」（下二段）ノ零トモイフ。

そして、第 228 節「ぬ」では、

動作ノ往キ畢レル意ヲイフ語ニテ、其意、零「つ」ニ同ジ。（中略）萬葉集ニ、此ノ「ぬ」ニ、「去」ノ字ヲ當テタル所アリ。

と記され、続けて第 229 節で、

此條ノ「ぬ」ハ、奈變ノ「往ぬ」ヨリ生ジタルモノトイフ、

と説明されている。この理解は「つ」の語源が「果つ」にあること、及び、「ぬ」においても「往ぬ」が語源³⁾であり、その語の持つ意味が助動詞「つ」と「ぬ」に残されているということに発する。

第 234 節に、「つ」と「ぬ」について、『活語指南』を引き「『つ』は多く他動詞に連なり、『ぬ』は多く自動詞に連なる」の相違とあるが、例外もあげ、「先ヅハ概則ナリト知ルベシ。尚、別記ニイフベシ」で結んでいる。

『廣日本文典別記』には、160 節にこうある。

本書ノ例ニテ見レバ、「つ」ト「たり」トハ現在ニテ止ル、「ぬ」ハ、現在ヨリ未來ヘ往ク、「けり」、ハ、過去ヨリ現在ヘ來ル、ナド區別スル説イカズ。

これは、先に述べたように語源「果つ」と「往ぬ」の解釈そのものである。確かに語源の持つ意味は大きいのが故に見逃してはならない要素である。『国語学辞典』において、「動作終結」と「動作結果発生」という説明に繋がる解釈がここでなされているのである。

そして、161 節には日本語文法学説をうちたて、その日本語文法学説の中に時制の文法を取り込もうとする意欲と自負が伺える文がある。

本書ニイヘル現在、過去（三様）、未来（四様）ノ分類ハ、全ク、此ノ書ノ新案ニ係る。（略）今ノ
佛蘭西、和蘭、魯西亜ノ文法ノ如キモ、皆、学者の作爲制定シタルモノナリト聞ケレバ、文法モ、
人爲ノカヲ借ルベキモノナラム、因テ、今、愚ヲ顧ミズ、私淑シテ、制定セシ所、本文ノ如シ、尚、
世ノ学者ノ評定ヲ待ツ。

学説の是非はともかく、大槻により日本語文法学説の確率が記されたことは銘記しておくべきであろう。163 節では、「つ」と「ぬ」の「音」についての考察がある。

元来、「つ」ノ音ハ鋭ニシテ、「ぬ」ノ音ハ軟ナレバ、必シモ自他ニハ關セズシテ、唯、語意ノ、其
場合ニ因リテ、緩緊アルニ從フモノカ。

この説は次に三矢文法の意義の差に一脈通じるものがある。

（3）三矢文法

三矢重松（1871～1923）はその著書『高等日本文法』において、「完了態」の項（p. 309.）を設けている。（1）で「つ ぬ」に言及し、

- さてツ ヌは等しく完了ながら、意義の差いかにといふに、
ツ 動作的故意的にして急、（短、硬）對話體の文に多く、
ヌ 狀態的自然的にして緩、（長、軟）叙述體の文に多し。（p. 313.）

と述べた後、動作的といっても他動詞だけではなく、狀態的といっても自動詞だけではなく、自動詞にも「有リツル、来ツル、鳴きつ」など動作的なものもあり、他動詞にも「為ぬ、暮シヌ、取ルヌ」など情態的なものもあると説明を加えている。此の区別の例として下記のことを挙げている。

「止メテバ」をナバとしては止ムル故意の動作を受け損じて「止ムルコトアラバ」のやうに緩く聞え、「有リナバ」をテバとしては自然に生存スル意味を失ひて特に或る動作をシタラバの様に聞ゆ。

「我も散リナム」をテムとしては死ナウを自殺シヨウなどともいひたら様にて「今イクカ有リテ若菜ツミテム」をナムといひては自然に摘ミ相ダと聞こえてツマレヨウの意通らず。（p. 314.）

また、

ツヌ口語にはタといふより外なけれど、ヌはシマフと言いかふべき事多し。（p. 315.）

とし、「色は匂へど散りぬるを」「散りぬれば戀ふれどしるしなきものを」は皆「チツテシマフ」と心得なさいと述べられ、「日なごりなく暮れぬればかへりぬ」とは異なるのだとしている。前は「シマフ」という意であり、後は「タ」の例として挙げられているのである。

（4）山田文法

山田孝雄（1873～1958）において「つ」は「陳述の確かめに関する動詞の複語尾」として「統覚の運用を助くる複語尾」の中に分類されている（『日本文法論』pp. 389～399. 明治 41 年實文館）。山田においては動詞は皆、複語尾を有するとされる。これは富士谷成章の六倫十二身と同様である。「統覚の運用を助くる複語尾」は 4 つの下位分類を持つ。

- 1、陳述の確かめに関する複語尾
- 2、回想をあらはす複語尾
- 3、推量をあらはす複語尾

4、非現実性の思想をあらはす複語尾 (p. 390.)

「つ」は「ぬ」と共に上記1に位置し、「つ」は下二段「ぬ」は四段の活用をなす。その意味の違いについて山田説は次のとおりである。

「つ」と「ぬ」とは共に事実状態の陳述の確めに興りて力あり。二者はこの點に於いて一致すれど又その間に差あり。即「つ」は其事実状態を直寫的に説明するものにして、その事実状態が文主によりてあらはさるゝことの確めを主者自らの側より直寫的にあらはすなり。

たれしかもとめてをりつる、春霞立ちかくすらむ山の櫻を。

郭公なきつる方を眺むればたゞありあけの月ぞ残れる

これに反して「ぬ」は傍觀的に其の状態動作を説明して其の動作状態の確かめをあらはす。

秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる。

たに川の流れし清くすみぬれば、くまなき月の影もうかびぬ。(pp. 393～394.)

古来の説、「他動」「自動」の区別、「状態」「動作」の別、時の差別に対しては、「よすがなし」としている。また、他の複語尾と複合している「つ」「ぬ」の別は一層明らかになるとして、

いつまでか野べに心のあくがれむ花しちらすば千代もへぬべし。

わらはごとには何かはせむおんなおきなををしつべし。

この「ぬべし」は其の事實を傍觀的に推量し「つべし」は直寫的に推量せるなり。

(p. 395.)

の例証をしている。そして、回想の「き」との相違に関連して、

「ぬ」「つ」と「き」とを混用すること古來頗多し(略)は現實意識に殘留せる活動をあらはし(略)然れども「つ」「ぬ」の本性は事物の動作状態の完了を述べるにあらずして、之を確めて述べるものなり。(略)この故にかの完了なりと直に斷じ去るが如きは不都合なりといふべし。(p. 396.)

と述べている。さらに「完了の事實をのみのぶるにあらず」の例として以下の口語訳を重ねる。

頼めこし言の葉今はかへしてむ。

心は花になさばあなりなむ。

「かへしてむ」は「かへしてしまはう」の意

「なりなむ」は「なってしまうであらう」の意

ふりぬべし。「きつとふるであらう」の意

覆しつべし。「覆ってしまうであらう」の意

これはただこの場合にあてたるのみ。すべて「きめて見る」「きつと云々」「さういふ事になる」の意を含めて義を取ることをうるなり。以上の所見によりて、吾人は之を確述の複語尾と稱し、あへて完了をあらはすものと稱せざるなり。(pp. 397～398.)

「完了」ではなく、「確かめ」であるとする山田の説は、上記の例が事実の完了ではなく、「吾人の思想内にあらはれたるもの」を述べているのだとするのである。

山田孝雄において複語尾は「思想」を表現するものとして規定されている。

動詞の本幹は唯單純素朴なる陳述をなしうるのみ。即、一の事實の發現を唯、何等の曲折なしにあらはすのみなるのみ。吾人の思想はしかく單純なるを得ず。こゝにその陳述の曲折をあらはさむが爲に複語尾を使用するに至れり。(p. 389.)

山田における「思想」は

吾人がこゝに思想といへるは、感情欲求等をも含有せる廣義の思想なり (p. 1.)

である。これは「思想」＝「日本語」であるといえよう。日本語の特色が複語尾に存するとい

う指摘そのものである。山田が「つ」「ぬ」を「完了」の意ではなく、あえて「確述」の意とした所以は以上である。

(5) 松尾文法

松尾捨治郎(1875～1948)は『国文法論纂』で下記のように説明を始めている。

歸りつ・歸りぬ・歸りたり・歸りれり・の四つは、何れも現在完了といふ時を表すといふのが、普通の説明であるけれども、此は時を表すのではなく、完了態を表すのである^⑤といふ三矢博士の説がよい。(p. 280.)

そして、「つ」「ぬ」の区別についてはかく述べる。

つ…語源果つ。(い) 有意の(わざわざする)動作を表す動詞の下に附く。(ろ) その結果は残り少く過去に近い。例えば「時鳥鳴きつる方を眺むればただ有明の月ぞ残れる」の鳴きつるなどは、時鳥が自然にその作用をしたのではなく、有意的にわざわざその動作をしたものと見たのである。空はれつなどといふにも、空が心ある様に書いたものと見てよい。

ぬ…語源往ぬ。(い) 態々でない自然の作用を表す動詞の下に附けて用ひることが多い。(ろ) 人の動作にしても手・足・口などの局部的動作には用ひず全身の動作に用ひる。例えば雨ふり出でぬ・空晴れぬ・をかしうなりぬ・自然の方で、入り給ひぬ・おはしましぬは全身の動作である。(p. 281.)

次に、「鳴く」という同一の動詞に「つ」「ぬ」が附く例を次のように挙げ前説を補強している。

・鳴かざりし鳥も來鳴きぬは、自然とさういふ様になったもの、時鳥鳴きつる方は、時鳥が鳴かうとして鳴いた者と、考へられるのではなからうか。即ち形は同一動詞であっても、それに籠れる記者の主観が違って居るものとしたなら、それによって、「つ」「ぬ」を使い分ける事があって、然るべき事と信ずる。(p. 284.)

そして、口語訳については、「あゆひ抄」の

萩の露玉にぬかんと取ればけぬ。よし見む人は花ながら見よ。(p. 286.)

を例とし、富士谷成章の「テシマフ」という口譯を良しとして、つ・ぬの本義果つ・往ぬ・に還元して、口語訳には「シマフ・ユク・クル・ナル」等を当てるのが妥当だとしている。

また、「源氏物語」の用例を調べた結果をあげ、「つ」は有意義でないのは殆どなく、又多くは過去の的であるとし、

「ぬ」は態々ならぬ自然の作用・變化例えば日月の経過等に専ら用ひられること、人の動作にしても、手、足、口などの局部的動作には用ひられないことは、斷言してよい。(p. 289.)

としている。また、「てむ」「なむ」について、「未来についての完了である」と言い表している。

遠鏡の序に

花や散リケムハ花ガ散ッタデアラウカ、花や散リナムハ花ガ散ルデアラウカト譯ス。サテ此ノチッタデト云フトチルデト云フトノカハリヲ以テ、ケムトナムトノケヂメヲサトルベシ。

とある。即ち本居翁はタといふ口語をば、なむの方には用ひない。廣日本文典別記には、押してむ、押しなむに

押スデアラウ。押シタラウ。

をあててある。(略)

自分は左の如くにあてたいと思ふ。花散りてむ。(散るなむ) 明日ナラ明日マデニ花ガ散ッテシマハウ。(明日マデ花ガ散ッテイカウ) (p. 300.)

と記され、「てむ」「なむ」が単に完了を表すものではなく、単に未来を表すものでもないので、

「押スデアラウ」や「押シタロウ」は使えないとするのである。松尾は

我が國の口語では簡単にそして完全に、未來完了を言ひ表す方法がないから、(略) シマハウ、ユカウと口譯した法がよいと思ふ。つが果つといふ動詞から、ぬが往ぬといふ動詞から出来たのであるから、比較的によくてむ・なむの意義に當る。(p. 300.)

として、山田が認めなかった「完了」ということばを「未来完了」と明記することによって説明している。

(6) 橋本文法

橋本進吉(1882～1945)の文法学説は学校文法として、今日まで多くの人に学ばれ、文法用語も定着している。その中枢は「文節論」である。

助動詞「つ」については、『助詞・助動詞の研究』においてその第七章「完了及び過去の助動詞」に記されている。「ぬ」と「つ」の相違についても橋本までの諸学者の説を引き比べている。

「ぬ」は動作の完成が實現する事、即ち實際に動作が完了する事(場合によっては實際に起る事)を云つたのではあるまいか。(p. 355.)

「つ」は現代口語の「た」にあたる場合が多い。(p. 362.)

「つ」は有意の動作につく事が多いのは事實である。それをヤッテノケルといふやうな意味があるのではあるまいか。動作が實現してはなれる意味、これが「つ」の特質ではあるまいか。「ぬ」にも、動作の完了し、實現する意味はあるが、それからはなれる意味は「つ」の特色であらうとおもはれる。(p. 368.)

橋本は「つ」は「た」への経過語として位置づけられ、「ヤッテノケル」という意味を含有すると指摘し、「ぬ」は事実の完了を冷静に述べたものと理解していた。

II 松下文法における「つ」「ぬ」

松下大三郎(1878～1935)は『改撰標準日本文法』において、日本語の特殊法則を一般言語理論によって解明した。山田文法の複語尾論と双壁を為す助辞論では精密な分析を行っている。松下文法においては觀念を表して言語の最低段階にあるものを原辞と称し、体言、用言は完辞であり、助辞は不完辞である。

「つ」は下二段活に活用する六つの動助辞(る・らる・す・さす・しむ・つ)の内の一つに属する。

つ 時鳥鳴きつ 梅の花を折りつ (p. 99.)

の例が挙げられ、下記のような活用が記されている。

| | 第一活段 | 第二活段 | 第三活段 | 第四活段 | 第五活段 |
|---------|------|------|------|------|------|
| [鳴き、折り] | て | て | つ | つる | つれ |
| | ム | キ | | | |
| | ヨ | | | | |
| | バ | | | | |

(p. 100.)

その意義については「時相」の項の「現在態」「完了態」「過去態」「未然態」の四つとその複合中、418 ページからの「完了態」の中で説明されている。「時相」とは松下において実際の時を示すものではない。

言語に於ては時を定むる基準即ち我の位置を何處に置くかの相違がある。我の位置の置き方に由つて事件との時間関係が種々になる。我を事件の前に置いて事件を迎へるか（未来）、我を事件と同處に於いて事件と接觸を保つか（現在）、我を事件の直後に置いて事件の通り過ぎるのを送るか（完了）、我を事件の去った後に置いて事件を追ふか（過去）に由つて時相は未来、現在、完了、過去の四態に分たれる。（p. 415.）

と「時に関する觀念の取扱方」が説かれている。「つ」とともに完了態に属する文語の動助辭には「たり」「ぬ」がある。その意義の差は、

一、對抗的完了「…つ」

二、逸走的完了「…ぬ」

三、一般的完了「…たり」「…り」「…て侍り」「…て候ふ」（p. 421.）

とされ、

「つ」と「ぬ」の別は從來「つ」は故意で「ぬ」は自然だと解釋され、又、「つ」は完了の即時で「ぬ」は完了の若干後だと解釋されたが其れでは不十分である。私は「つ」は對抗的で「ぬ」は逸走的だと思ふ。（p. 422.）

と、独自の見解を表す。そして順次その意義を説明している。

對抗的完了

對抗的とは事件を我に對して打突かつて來るものとして之を對手にする意である。他物の動作が我に何等かの利害が有るとか何等かの興味を與へるとか見た場合である。自己の動作でもそれを一つの他物の如く取扱ひ其の動作に對して自己が何等かの興味を持って接する。要するに自他の動作を對手にするのである。（p. 422.）

すなわち、對抗的完了とは自分の意識や考え方や期待に對して、反対の結果をもたらしてしまう場合、それを對抗的と捉えるのである。次の説明がそれを表している。

自他を對手にするといふことを具體的に説明するのは完了態以外の例を引くのが便利である。口語の下等な語に「やがる」といふ卑稱がある。又西部地方では動詞の第二活段へ「居る」を附ける。これは動作を我に對抗するものとして對手にするのである。

彼奴とうへ参りやがった（参り居った）。

畜生又雨が降りやあがる（降り居る）

昨日飯前に出たら腹がへつて來やがって困つて仕舞つた。

これは人の動作や天氣や自己の空腹を對手にするのである。又利益態も動作を對手にする。

さあ一つ寝てやろうかな。 降るかと思つたら晴れて呉れたぜ。

「寝てやる」は寝るといふ事柄に對して主觀が之に打突かつて行くのである。

客態尊稱の「申上ぐ」「申す」、謙稱の「申す」、莊重態の「致す」なども對抗的である。

御手傳ひ申上げませう。

御笑ひ申したではありません。

毎日遊び暮し申し候ふ。

大に感服致した。（pp. 422～423.）

というように、完了態以外の例と次のような例を挙げている。

誰しかもとめて折りつる、春霞立ち隠すらむ山の櫻を。古今集 …誰が見附けて折り居つた（折りやあがつた。）

紫の色の深さは水底に見えつる藤の花にざりける。躬恒集…水底に見え居つた（見えやがつた）藤の花。

起きもせず寝もせず夜を明しては春のものとして詠め暮しつ。業平集…詠め暮し申し候ふ。（詠め暮

し居った。)

梓弓推して春雨今日降りぬ。明日さへ降らば若菜摘みてむ。古今集…一つ若菜を摘んでやろう。
我がせこがあとふみもとめ追ひ行かば紀の關守 止めてむかも。萬葉集…止めて呉れるだろうかま
あ。

久方の天の河原のわたし守君渡りなばかち隠してよ。古今集…梶を隠して呉れよ。

徒然と花を見つゝぞ暮しつる、今日をし春の限りと思へば。古今六帖…暮すとを致した。(p. 423.)
そして、

勿論「つ」を「居る」「やがる」「やる」「呉れる」「申す」「致す」などと同義だと云ふのではない。

「居る」「やがる」「やる」「呉れる」「申す」「致す」等には卑稱、尊稱、利益態、莊重態等其れへ
の意義がありそうして完了の意義はないが、その事件を對手にする意味は皆共通に持つて居る。唯
其の對手にする意味だけが「つ」と同じだと云ふのである。「つ」を「やがる」と同じだと解して
はいけない。「つ」は自他の動作を對手にする意味があるから自己の動作である場合には努力的動
作を表すに最も適當だ。

濡れつつぞ強ひて折りつる、年の内に春は幾日もあらじと思へば。古今集…折ることを致した。

こういふ例から従来「つ」は故意的だといったのである。しかし故意と云つては他人の動作は勿論
自分の動作でも富たらない場合が多い。「痛く酔ひつ」「此の暮は我負けつ」などは故意とは云へな
い。唯「非常に酩酊致した」「敗北致した」と云ふ様に自己の動作を對手にするだけである。
(p. 424.)

としている、そしてさらに、

故三矢博士は従來の説を改めて「ぬ」は狀態的で「つ」は動作的だと云ひ、山田孝夫氏は「ぬ」は
其の主の勢力を認めずに云ひ「つ」は其の主の勢力を認めて云ふと解した。二氏の説は従來の説に
比して非常に進歩した説である。しかし、動作的とか主體の勢力とか云ふことは甚だ抽象的である。
「水底に見えつる藤の花」などの「見えつる」がどうして動作的であるか、其の主の藤の花がどう
いふ點に於て勢力を認められて居るかといふことは明瞭ではない。こういふのは藤の花の水底に見
えるといふ事件が我の視覺に對して向うから打突かつて來るものとして我が之を對手にして考へ
る。即ち藤の花を我に對抗する他の主觀として取扱ふといふ具體的説明の上に、始めてその動作
的とか主體の勢力とかいふことの意味が闡明されると思ふ。(pp. 424～425.)

と補足している。

「つ」は動作を對手にする意が有るから其の動作がまだ遠く去らない様な感じがある。そこで完了の
即時を表すのに適當である。

時鳥鳴きつる方を眺むれば唯有明の月ぞ残れる。千載集

待つ人も來ぬものからに鶯の鳴きつる枝を折りてけるかな。古今集

「鳴きつる」は今鳴いたばかりで其の聲は耳に残つて居る様に感ぜられる。しかしこれは「つ」の
事件を對手にする意義から偶然に分派する意味であつて、「つ」が常に完了の即時なのではない。

夏衣立ちてし日より郭公とく聞かむとぞ待ち渡りつる。貫之集

年毎にたなばたつめを祈りつゝ多くの秋をすぐしつるかな。兼盛集
などは決して完了の即時と云へない。

「つ」を意志的であるとか完了の即時であるとか云つたのは完了といふことを客體的の事實と考へ
たから起つた説である。完了態は決して事實の完了を表すものではない。意志的であつても自然的
であつても完了の即時であつても數年後であつても、そんな事實問題に関係なく、唯その事件を對

手にする意味を持ちつゝその觀念を自己の背後へ送るとして取扱ふだけである。(pp. 425～426.)
として、その解説を閉じている。松下の説はⅠ. 助動詞「つ」理解の変遷で解説した説と比べると際だって特異な観点からの指摘であろう。その特徴は「ぬ」及び「たり」の意義を示す中でさらに明らかになっていく。「ぬ」逸走的完了と「たり」一般的完了は次の様に説明されている。

逸走的完了

「ぬ」を附けた完了態は「つ」を附けたものとは違って、毫も事件を對手にする意味がなく、事件は我と無関係のものと見られ、我に對抗せずすらへと逸走するとして取扱はれる。事件に対して無関心で冷淡である。(p. 426.)

逸走的完了というのは、事実を整然とありのままに述べる態度をいうということになるろう。次に「たり」に関しては

一般的完了

「たり」を附けた完了態と既然性轉活用(…り)を使った完了態及び「て」の下へ「侍り」「候ふ」を附けた完了態(「て」なしの場合もある)は逸走的でもなく對抗的でもない。即ち何等特殊の意味のない無色的な單純な完了である。(p. 427.)

と解される。「一般的完了」は「對抗的完了」や「逸走的完了」の付け足しであるようにさえ見える。それほど「つ」の意義は特徴を持ち解明に時を割かねばならないのである。

これほどの意義を持っていた「つ」、音韻的には「つ」から派生したと考えられる「ぬ」が現代日本語には全く見られなくなっている³⁾。室町期には「つ」も「ぬ」も消えてしまったのである。

静助辭の「て」及び動作性活用の第二活段は完了の意がある。動助辭の「つ」は此の静助辭「て」を活用させたものである。「ぬ」は「つ」の通韻であろう。(p. 429.)

と松下は言い、助詞「て」が「つ」の源であり、「て」から文語の助動詞完了態「ぬ」も「つ」も「たり」も「り」も全て現れてきているのではないかと言うのである。

では、現代語の「て」ははたして「つ」及び「ぬ」の源流にあったとされる「て」とどのような関係にあるのだろうか。以下では、「つ」「ぬ」の意義と「～てしまう」の関連に着目し考察を進めることにする。

Ⅲ 「～てしまう」に残る「つ」と「ぬ」のモダリティ

国立国語研究所所長、水谷修(1932～)はこんな話を紹介している。

外国人の学生が「僕は二月に結婚してしまいました。僕は幸せです」と言った。この誤用はなぜ起こったのだろう。「…てしまう」は完了を表すという定義ではこの誤用は矯正できない。われわれが「…てしまう」を使うときには(自分の意に反して)という条件が加わっていることに注意したい。(『日本語』p. 64.)

また、寺村秀夫(1928～1990)は、『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』で、

「完了」というのは、客観的には、ある時間継続した動きが終点に達したこと、完成したことをいうのであるから、瞬間的なできごとや動きを表す動詞については言えないわけである。そういう事象を表す動詞に～テシマウが付くと、「その事が起こっても、もはや起こる前の状態に戻ることはできない」という心理を表すことになる。それは自分ではどうしようもないできごとの場合には悲し

みを、自分のしたことならば後悔を伴うのがふつうである。(p. 153.)

として、「～オウル」と連結しない「死ぬ」と「始まる」の例を出している。

| 図1 | ～オウル | (～テ) シマウ |
|-----|------|----------|
| 書 ク | ○ | ○ |
| 食ベル | ○ | ○ |
| 死 ヌ | × | ○ |
| 始マル | × | ○ |

(出所：『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 p. 154.)

これは、「～オウル」が時間的幅をもって行われる動きや変化を表す動詞のみに後続でき、「死ぬ」「始まる」などの点的な瞬間のできごとを表す動詞には連結できないことを意味している。このように「～オウル」に連結できない類の動詞には「失う」「終わる」「お話しする」などがあるが、そのどれにも「～テシマウ」は後続できる。その意義は完了ではなく、一種悲しみを伴う心理を含んでいる。

また、同ページには、

元の状態には戻れない、とりかえしのつかない、という気持ちは、しばしば自分の意志で実現・非実現が可能なことなのに、意識よりはやく身体が動いた、というような状況の表現としても使われる(p. 154.)。

と記され、「～オウル」で言い換えられない「～テシマウ」の表現に「心理的な完了の強調」と言うことばで解釈するしかないものがあると指摘している。そこでは、「テシマウ」の「シマウ」は、「仕舞う」を彷彿とさせ、「処理スル」「収納スル」の意を背後にもつ。この意味が拡大していき、「心理的完了」を含むようになったし、客観的事実について観察的に述べる態度も含むようになった。さらに、そのことによって自己（主体）に関わることを説明する心理をも含むようになった。そうした例として、「走る」「読む」「食べる」などが挙げられている。このように「テシマウ」は多義的である。また、「つい」などの副詞があれば一層明瞭に心理的解釈ができる。その例として、

ほんまにうれしいあられですね。つい手が出てしまいます。(p. 154.)

が挙げられている。また、「～チャウ」「～チャッタ」は悲哀や後悔ではなく、「シメシメ」という感じ、意外な事の成りゆきを喜ぶような場合にも使われるとしている。

「貯金の現在高が九万二千円になっちゃった」ぼくは通帳を開いて庄平君にみせてやった。(p. 155.)

のようなものである。さらに、意志性の動詞についても解説を進めている。意志表明や勧誘の「～ショウ」や、命令形になると、早く、ただちに、その事を実現させよう、実現しろという意味、になる。例としては、

暗クナラナイウチニ、ヤッテシマオウ。ハヤクヤッテシマイナサイ。

どこへでも行っておしまい。別れておしまい、別れておしまい。(pp. 155～156.)

などである。

「基本的に、行為、動作、できごとが完了したことを特に強調する表現である」としてはいるが、この「特に強調する」というのは「話し手の心理的反応を表す」ということと等位なのである。「話し手の心理的反応」というのは「モダリティ」の範疇に入らないのであろうか。

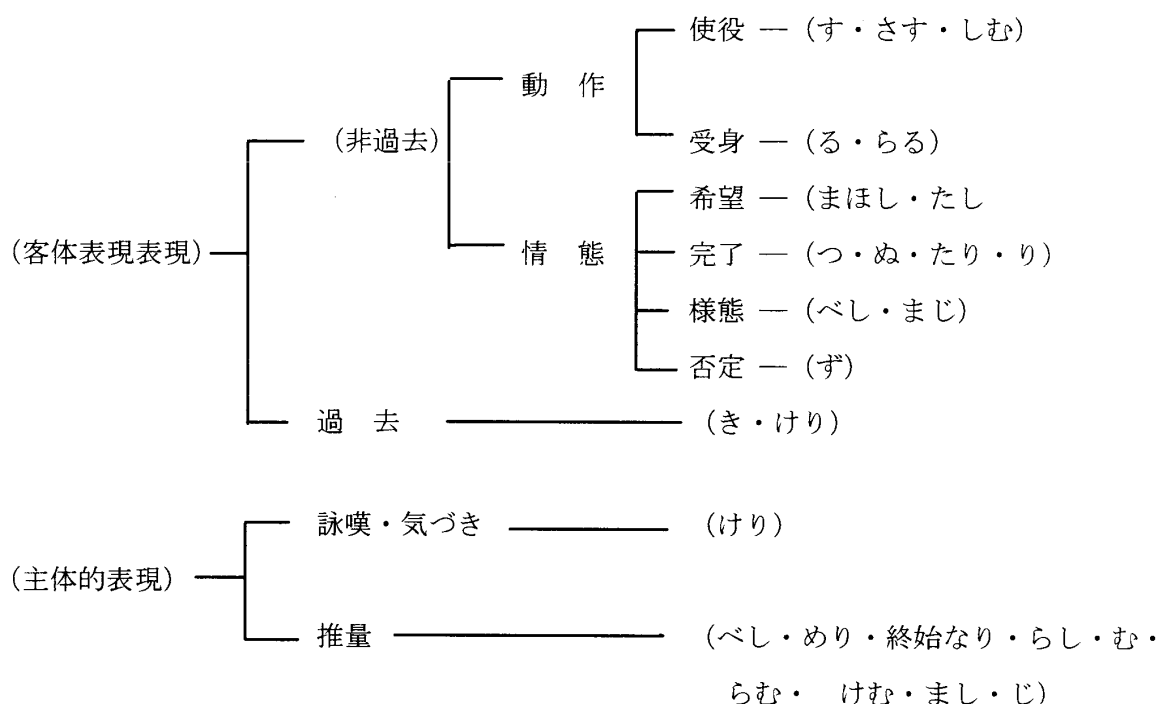
寺村はモダリティーには入っていない。

さて、ムードということばは『日本語教育辞典』には次の様に出ている。

事柄・叙述内容、又は、話し相手に対する話し手の態度が一定の文法形式—普通は動詞の形態—によって表現されるとき、それをムード、又はモダリティーという。(略)ムードは元来ラテン語の *modus* に由来するが、(略)ディクティムとモドゥスという対立概念で広く知られ、国語学者の中にもそのまま文法用語として使う人が少なくない。それは客体界を概念的に表現する部分と、それを素材として話し手が自分の判断・感情・意志などを表現しようとする部分とから成るとする言語観が国語学の伝統に根強く受け継がれてきたことに支えられている。(p. 191.)

また、北原保雄(1936～)は、意味の上からの分類として『日本語助動詞の研究』で下記の図を載せている。

図 2



(出所：『日本語助動詞の研究』 p. 637.)

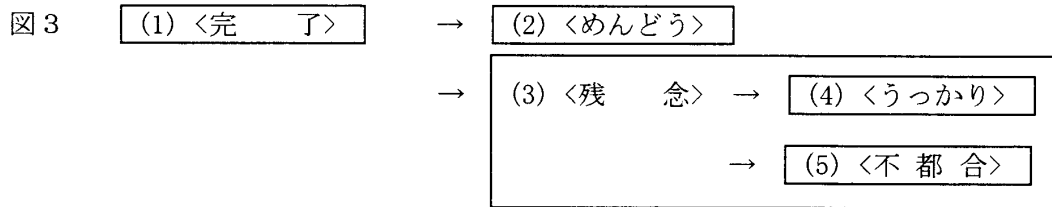
これは、客体的表現と主体的表現の二類に大別される文語助動詞の図である。図にあるように、「けり」は(客体的表現)の過去と(主体的表現)の詠嘆・気づきのどちらにも入る二面性を持つ助動詞として分類されている。

松下大三郎の主張した「つ」の持つ意味「対抗的」は、特に「ぬ」と比較した場合、主体的表現の範疇に分類されることに気づかされる。勿論「ぬ」にも心的表現はある。このことは富士谷成章によって、「その事のうへに勢をあらせて」や「したしくいはば、さはありがたからんとおぼゆる事の終に成りたるやうの心なり」(『あゆひ抄新注』p. 303.)と指摘されていることである。これは、「ぬ」で表わされることが都合良く、都合悪く、こちらにはお構いなしに意外な形で突然に、経過など気付かぬうちに、ある事柄が起きてしまったことを示す。

このような、「つ」「ぬ」の意味が「～てしまう」へと引き継がれているとすると、寺村の言う「心理的反応」の主体的表現は「つ」「ぬ」にも含まれていたと言える。「つ」と「ぬ」は先の図2の「けり」と同様に二面性を持つ助動詞と分類されよう。「けり」は「過去」と「詠嘆・

気づき」の意味を持ち、「つ」「ぬ」は「完了」と「主体の心理的表現」を併せ持つといえる。

吉川武時（1938～）は『日本語文法入門』で、「29『～てしまう』」の項を設け、「完了」以外の重要な意味として、四つ挙げている。そして、その関係は次の図になる。



（出所：『日本語文法入門』 p. 130.）

(1)がアスペクト(2)(3)がアスペクト・ムード(4)(5)はムードであると考えられるとしている。そしてその表現を纏めると次のようになる。

- (2) 積極的に動作に取り組み、これをかたづけることを〈めんどろ〉
- (3) ある動作・作用が行われた結果の取り返しがつかないという気持ちのことを〈残念〉
- (4) 人の動作が無意識的に行われることを〈うっかり〉
- (5) 不都合なこと、期待に反したことが行われることを〈不都合〉

そして、「逸走的、対抗的、無意志的、期待外」としていたものを、分かりやすくしたと解説してある。この「逸走的、対抗的」は松下の用語で、「ぬ」と「つ」の違いに用いたものであった。

「～てしまう」と「つ」「ぬ」との関連性はさらに明らかになってきた。吉川においては「ムード」という用語を使って、その意味理解を深めようとしているのである。

また、丸山啓介は「～てしまう」を①「全部」「完了」②「まずい、残念」③「ついうっかり」「予期せぬ事態」の三つに意味分類している。（『ことばの整理2』京都日本語教育センター）ここではモダリティーやムードということばで表現はされていない。

ここで、まだモダリティーということばで「～てしまう」を括れないとする論を持つ仁田義雄の説を見てみよう。仁田は『言語 28 巻』「モダリティーを求めて」で次のように述べている。

「テシマウ」については、〈実現〉といったアスペクト的意味を表すものの、〈後悔〉や〈不本意〉や〈反期待〉などといった話し手の評価や感情的意味がつきまとっている。（略）「上司をぶん殴ってしまった」のように、形式自体が過去形に成っているのにも拘わらず、発話時の話し手の評価・感情的意味を表すことを考えれば、「テシマウ」をモダリティーとして表示する形式として扱うことも分からないわけではない。（略）「早く読んでしまいたい」のように通常言われているマイナスの評価や感情的意味を帯びない使われ方や、文的度合いの低い従属節でも何ら問題なく使われる—例えば、「眠ってしまったら、負けよ」—ことからすれば、直ちにモダリティーの表示形式として認定することには悩む。（p. 43.）

としている。前書には藤井由美の「してしまうの意味」⁴⁾などのようにモダリティーを表す形式として積極的に位置づけている研究を紹介しているが、仁田はモダリティーの表示形式からは排除したいとしている。しかし、

あいつ、俺のプラモデルを壊しやがった。のような「(シ) ヤガル」（さらに「(シ) クサル）」という形式がある。〈ぞんざい〉という述べ方に関わるところがあるにしても、ある種の評価・感情的意味を付与しているのであろう。これも形式が過去形になっても、発話時の話し手の評価・感情的意味を表す。さらに、この形式には、「シテシマウ」に見られた評価・感情的意味の解除がない。

その意味では、「シテシマウ」よりさらに、モダリティー的形式であると言えよう。しかし、筆者には、モダリティー形式としての認定に絶対的な自信がない。(p. 44.)

「シヤガル」「シクサル」については、「モダリティー的形式」という見解は述べられている。さて、松下大三郎の「つ」の理解は、「～てやがる」に代表されるような「自他の動作を相手にする」「対抗的完了」だとされており、「つ」は感情表現だといえよう。これは上記に引用した仁田のいうところと重ね合わせると「つ」にモダリティー的要素が含まれるということにならざるをえない。

完了のアスペクトに対応して派生する主体の感情や意識を表現するとき、「つ」や「ぬ」がモダリティーを表すといえるだろう。

おわりに

本居宣長は『古今集遠鏡』の中で口語の上では区別できにくい文語をこう述べている。

ぬ・ぬる、つ・つる、たり・らる、き・しなど、既に然るうへをいふ辞は、俗には、皆おしなべてタといふ。

古典の現代語訳はその内容の正確な表現としては困難なものがあるに違いない。ことばが延々と続いてきた人々の営みであるとするならば、文献を便りに探っていく試みの中から、ことばの変遷を考慮しつつ現代人により理解しやすい訳を求めていくしかない。

古代語から現代語に変化する過程において、完了の「つ」「ぬ」「たり」さらに過去の「き」「けり」「り」が消滅し、「た」のみになるといった歴史は、ことばの単純化である。語の構造がスリムになったという点では喜ばしい点もあろう。人間の精神的営みの変化は社会構造の変化ほどには変化を遂げていない以上、複雑化した主観的・感情的表現は単純な表現の影に隠れているといえる。また社会変化に対応した新しい表現も生まれてくるだろう。本稿で明らかにされたことは、似た表現が存在することの意味であり、また、過去にあった表現の現在につながる変遷であった。「つ」「ぬ」「たり」という似通った表現の中に客観的表現や主観的表現の別を意味付けようとするのは、人間の感情表現をきめ細やかに表そうとした古代人のコミュニケーション能力の素晴らしさである。そして、「～てしまう」という現代語はその多義的意味の中に「つ」「ぬ」の持っていた意味を受け継ぎ、悲哀、無念、残念さ、惜しむ感情などを表現することばとしての機能を果たしているのである。

残念ながら本稿では、時枝文法などには論究できなかった。また、完了の周辺にあるテンスとの関連、及びアスペクト、モダリティーなど解明を要することは多岐に渡る。さらに、富士谷成章の「表」「裏」という観点から解明する必要もある。これらについては次稿に譲る。

- 1) 1997「シテ形接続をめぐって」『別府大学紀要第39号』別府大学会。
1997「シテ形接続と連用形接続の使用の実際」『留学生教育第2号』留学生教育学会。
1998「主節とシテ節の意味的關係」『別府大学紀要第40号』別府大学会。
1998「韓国人学習者のシテ形接続と連用形接続」『留学生教育第3号』留学生教育学会。
- 2) 竹岡正夫の注釈には下記のように記されている。
この説明によって、「タゾ」の表すところがよくわかる。相手に、対象をそれと言い知らせる気持ちがあるわけで、「ゾ」は単なる強調ではない。また、ここで成章のいう意味は、同時に終止法よ

り来る意味も含んでいる。[つ]に「人に向かひてのみ言ふ」意があるのではない。これは[き]の説明にも見られたところ。(『あゆひ抄新注』p.320.)

- 3) 「つ」の語源が「棄(棄つ)」にあること、及び、「ぬ」においても「去(去ぬ)」が語源であり(大野晋他)、その漢字の持つ意味が助動詞「つ」と「ぬ」に残されているということに発する。『国語学大事典』北原保雄(1981)他では『ぬ』は『往ぬ』から成立されたもの」と認められる。
- 4) 『ことばの科学5』1992.

参考文献

- 北原保雄他編(1985)『日本文法事典』有精堂出版。
国語学会編(1999)『国語学大辞典』東京堂書店。
佐藤喜代治編(1996)『国語学研究辞典』明治書院。
山口明穂編(1987)『国文法講座1』明治書院。
山口明穂編(1987)『国文法講座2』明治書院。
山口明穂編(1987)『国文法講座4』明治書院。
大槻文彦(1897)『廣日本文典全』東京築地活版製造所。
大槻文彦(1897)『廣日本文典別記全』東京築地活版製造所。
三矢重松(1908)『高等日本文法』明治書院。
山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館。
松尾捨治郎(1928)『国文法論纂』文学社。
橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店。
松下大三郎(1974)『改選標準日本文法』勉誠社。
宮地裕・水谷修(1989)『日本語』大蔵省印刷局。
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版。
徳田政信(1966)『新訂日本文法論』風間書房。
北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店。
北原保雄編(1988年)『日本語と日本語教育第4巻』明治書院。
吉川武時(1989)『日本語文法入門』株アルク。
日本語教育学会編(1998)『日本語教育辞典』大修館書店。